

## 南西諸島の平家・源氏伝承

東 喜 望

はじめに

かつて本学の日本文学会で「南海の平家伝承」と題して講演したことがある。このたびはまた、ある学会から依頼されて、南西諸島一帯に伝えられている平家落人伝説や、奄美・沖縄の為朝伝説について考察してきた。時間や紙数の制限があつて、いずれも意を尽くし得ないままである。

私はつい最近、昨年につづき奄美諸島を再訪し、この論考に関連する現地をつぶさに調査した。その調査成果もふまえながら、ここでは既に仕上げた論稿に新たに補説を加え、写真資料等を添えて、内容を増補した。ひとえに、本論考の課題とする南西諸島の平家・為朝伝承考究の実証性（または論証性）を高めたいからである。

最近、新川明氏の『沖縄・統合と反逆』（筑摩書房刊）が出版された。沖縄内部にひそむ自己矛盾を鋭くえぐり出したこの著は、われわれを啓発してやまない。いったい、いつ頃からどのような事情があつて

「統合」が始まったのであろうか。本稿は源平伝説の考察をとおして、南西諸島の、そのような問題にも言及していく所存である。

ちなみに、薩摩半島の南に浮かぶ三島（竹島・硫黄島・黒島）を口の三島といい、口の島以南を沖の七島（口の島・中之島・臥蛇島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島＝吐噶喇列島）という。合わせてこれを十島といい、その先に奄美五島（喜界島・大島・徳之島・沖之水良部・与論）がある。周知のように、奄美諸島は元、琉球国に属し、今も言語（方言）・民俗文化ともに琉球の文化圏内にある。だが、慶長十四年（一六〇九）、島津藩が琉球へ侵攻し、翌々年、いわばその「戦果品」として琉球国から割譲され、以後、島津藩の直轄領となり、黒糖の収奪等により、塗炭の苦しみを味わった島々である。

十島は現在もなお秘境であるが、現地を実際に訪ねてみると、七島には琉球文化とヤマト（いわゆる本土）文化が重層して遺っており、口の三島には、古代をふくむヤマト文化の影響が色濃く遺っている。

## —

近世中期、備中下道郡岡田の古河古松軒（本名、辰・正辰。のち岡田藩士）は、天明三年（一七八三）三月下旬、故国をたち尾道・広島・下関を経て九州に入り、豊前・豊後・日向・薩摩・肥後・長崎・天草等を巡回して同年九月二日下関に至っている。この時の旅の記録が『西遊雜記』であるが、それによると、彼は六十六部の修行者に身をやつし、六月中旬、監視のきびしい薩摩領へみごとに入国している。「修行者」と記した手形を予め故国でつくらせ、これによって関所を巧みにすりぬけているところから見ても、その入国は明らかに潜入である。今日でいえば、偽造パスポートによる不正入国ともいうべきか。

六月十九日、彼は鹿児島城下に至り、注意深くこれを観察して曰く「鹿児島、要害のため最上の地というべし」と。つまり、最高に堅牢な城府だというのだ。

この城府への入口は、海路ともに五か所あり、陸路はいずれも険しい坂道の難路だという。城府の東は海、西方を山が「連々とし」て囲み、南北およそ三十町の城下町だとも記している。領内には、知行高三万石の武士が七名おり、城下には、これに続く武士（人数不明）が常住する。古松軒が注目しているのは、そのほかに、薩州・大隅・日向の三州に「百二十余」の外城（とじょう）を設け、平常は農耕に従事しながら、これに所属する士分がじつに「三万人余」りもいたことである。これが

いわゆる郷士であるが、彼らは「番頭」（正しは地頭）に統率され、番頭は月番で鹿児島へ登城して参勤したという。ちなみに、この外城制度は戦国時代に始まる。

武士の気風は、鎌倉の遺風があり、上方筋の武風などとは違って、質素剛健で「頼母しき体」にして、「秀吉公にこそ手もなく責（せ）やぶられし事なれ、何国の戦ひにても薩州軍はねばり強くして、きたなき負けをせず」とその武士団を高く評価している。聞き取りをもとにした古松軒の記録を、そのまま鵜呑みにはできないにしても、のち加賀に次ぐ七十七万石の雄藩としてのしあがった近世期の島津藩領内が、挙国体制をとる頑強な軍事ブロックであったことはまちがいない。だから、他国他藩に対しては防衛意識が強く、閉鎖的になりがちである。薩摩への出入国を監督する関所や津口の苛酷なまでのきびしさは、よく知られるところである。

いわゆる天明の飢饉が全国に波及していたこのころ、古松軒がどんな目的で西国を巡回したのか知る由もないが、この閉鎖的な鹿児島で、彼は寺院を訪ね、琉球館（現・長田中学校）をおとずれている。例のごとく立入り禁止で中へは入れなかったが、市中で琉球事情や離島のことを調べ歩いたらしく、琉球館には約百人の琉球人が常駐し、学文・諸芸を習うとともに琉球産物の売買・交易に従事していることを聞き出している。次いで、彼らの髪型や服装にもふれ、山川港を起点とする琉球への航路のことや島々に藩の在番が存在すること、琉球（奄美を含む）から上納される貢米が「十余万石」であることなどを記し、そ

の琉球が中国・薩摩に両属している事実までもつかんでいる。そしてこのことについて「薩州にては知りても知らぬ体にて是まで済来りし」とも記している。

そんな古松軒は、南島への想いがよほど強かったと見え、硫黄島の俊寛僧都遺跡の有無を浦人（漁師か）に聞き歩き、海路僅か「十里」（実際は二三〇キロ）の屋久島へさえ渡航できぬのを嘆じ、「国禁もなくば琉球にても一覽せんと思ひし事なるに、目とどきの島へだに渡らざりしは扱残念の事なりし」と述懐している。

古松軒が身をもって体験したように、近世期、ヤマト（本土）側から見れば、南西諸島は島津藩によって、いわば封印された境域だったのである。

だが、古代の一時期、遣唐使船の航路となり、のち中世期、日宋貿易や東南アジア貿易の航路として開かれた海域であったことは周知のところである。

## 一

今、仮に国土地理院発行の地形図を見ると、硫黄島北端の岬と黒島北西の沿岸に「平家城」という地名の存在することがわかる。「鹿児島県市町村別遺跡地名表」には、宝島の城ノ山が「平家の城跡」と記載され、遺跡に指定されている。薩摩の「元禄国絵図」には、硫黄島に同じく「へいけの城」という記載がある。このような地名の残存は、

平家に関するさまざまな伝承がかつて十島に存在したことを想像させる。では、どのような伝承があるのだろうか。以下、文献に拠りながら十島の平家伝説を概括しておきたい。

近世期において、十島を初めて総括的に記した地誌は、島津藩庁編『三国名勝図会』<sup>③</sup>（天保十四年刊）である。同書巻之二十八に十島の記載がある。近代に至り、旧島津藩士らの編集した『薩隅日地理纂考』<sup>④</sup>が明治四年頃、刊行される。これらの地誌は、諸古文獻と藩庁で調査した記録や収集した文書等を資料として叙述したものであるが、明治十年代の半ばに至ると、県命を受けた県庁の官吏たちがこの絶海の孤島を巡回し調査記録を遺すようになる。

鹿児島県庁勸業課長白野夏雲が明治十七年（一八八四）三月二十九日から五月六日まで十島を巡視して『十島図譜』と『七島問答』<sup>⑤</sup>を遺し、翌十八年は地租改正調査のため、収税属赤堀廉蔵ら二十三名が危難に遭いながら四か月余、十島と口之永良部を調査し、『島嶼見聞録』<sup>⑥</sup>を刊行している。これにつぐ記録が『拾島状況録』<sup>⑦</sup>である。これは奄美諸島の島司・笹森儀助らが、明治二十八年（一八九五）五月十一日から八月二十七日まで十島を視察した時の調書である。邦人の記したものでいえば、これらの書が近世期から近代初期に至る十島を記した基本的な資料であるが、比較すると各書は先蹤を参考にしながら叙述しているので、記事の内容が重複しているものもある。

前掲の硫黄島の「平家城」についていえば、『七島問答』を除く各書に記載があり、海上に臨む一つの孤山をなすこの一帯は、かつて平家

の城壁であつたという。同島西端部の平坦地・城ヶ原も平家落人の城壁であつたとされ(図会・纂考)、のちの記録(見聞録・状況録)には、この城ヶ原が平資盛の本營で、その南側の小岬・永良部崎(口之永良部を望む故にこの名あり)が越中次郎兵衛景光の居城、青野城が上総五郎兵衛盛継の支城で、「平家城」は福原相模守季長の居住地だと記されている。景光・盛継・季長は資盛の家臣だという(「硫黄大権現宮」)。青野城は青尾城が正しく、現集落東側の稲村岳である。

『島嶼見聞録』の「硫黄島」履歴の冒頭に「元暦二年壇ノ浦ノ役大敗シ資盛・経正・業盛等幼帝ヲ奉擁シ其三月十五日壇ノ浦ヲ発シ遁レテ本島ニ渡航シ五月一日長浜浦ニ着シ、直チニ黒木ノ御所ヲ造営シ尋テ所々ニ城郭ヲ築キ軍備ヲ整フ」(句読点、東補)とあり、次いで安德帝が六十四歳で崩御し御前山に埋葬されたことやその神社・硫黄大権現宮が建立され、資盛の子・吉資の末裔にあたる長浜衛守が現在その宮司をつとめ、同社の縁起や同家の系譜等を所持していることなどが記されている。この長浜家に伝存する古文書とは、「長浜氏嫡流系譜序」「硫黄大権現宮」「三所大権現宮鎮坐本記」「俊寛成経康頼由緒書」で、その写しが付載されている。『見聞録』の前述の記事は、「硫黄大権現宮」(漢文)「三所大権現宮鎮坐本記」に拠ったものと考えられるが、殊に後者には安德帝や資盛らの敗走の行程と渡島後のいきさつなどがかなり詳しく和文で書かれている。

それによると、三月十五日壇の浦を発した一行は、伊予高島・日向細島・大隅志布志・種子島の浦田・内の浦、佐多の大泊を経由して五

月一日硫黄島に上陸したことになっている。家臣二百人が僅か二日で黒木御所を建設し、のち前述の地に城をかまえるが、建仁二年の春に至ると源氏の兵船が時折出現するようになり、資盛・時房らは椰榔国(琉球大島)へ、清房・忠綱は益救島(屋久島)へ、宗親・通正は黒丘島(黒島)へ落ちのびて行つたという。かくて、硫黄島に残つた経正は貞応元年(一二三二)秋ごろに没し、安德帝も寛元元年(一二四三)五月五日の夜、崩御したとある。その一切の面倒を見たのが長浜氏の先祖吉英と吉盛だという。

この文書の記載に関して付記しておきたいのは、敗走する平氏の斥候隊が修験者に身をやつして行動していること、安德帝生存中、食糧を運んで帝を援けたのが隣島黒島と竹島、種子島と七島・奄美だとされ、殊に七島の日高・有川・肥後・平田・新羅(のちの白木)の五家は、資盛・時房・有盛の家臣とされていることである。

前掲の地誌や調査記録では、諏訪之瀬島(文化一〇年噴火。悪石島へ移住)を除く十島(含、小宝島)と口之永良部島の各島が平家潜居の島とされ、日高・肥後・平田の各家は、自ら平氏の末裔と称して近世期、庄屋や郡司をつとめ、系図または由緒書・家譜を所持する家もあるという。まとめると左記のようになる(△は系図、○は由緒書または家譜)。

黒島Ⅱ庄屋日高(図会・纂考) 竹島Ⅱ△庄屋日高(図会・纂考)  
口之島Ⅱ○郡司肥後(図会・纂考・問答・見聞録・△Ⅱ状況録)  
中之島Ⅱ○郡司日高(図会・纂考・問答・状況録) 平島Ⅱ○郡司  
日高(図会・纂考・問答・見聞録) 宝島Ⅱ△○郡司平田(△Ⅱ図

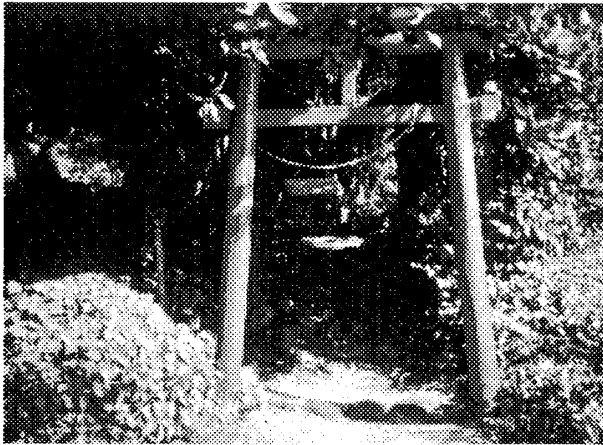


写真1 中之島シマナカドン

は霊位高い拝所として島民に畏れられてはいても、巨木の下に一メートル足らずの自然石を置いただけの小さなもので、京の貴人の墓とは思えない。その規模や形態は、沖縄のイベ（忌迎）や拝所<sup>ウガンジュ</sup>に酷似していることを指摘しておきたい。平島の郡司日高弥平所持の家譜では、その始祖が有盛の子息・新少式になっていると

会・纂考・状況録。○Ⅱ見聞録・状況録

右のうち口之島の郡司肥後休右衛門所蔵の由緒書には、その先祖が彦山の山伏に依頼して山伏姿に変身して渡島したと記されていたというが、後年の家譜では、この渡島者は政盛といい、平基盛五代末の裔と明記されているという（見聞録）。彼らの住居跡は「平家城」と呼ばれた（図会）ともあるが、その遺跡は今確認できない。次島中之島の郡司日高十左衛門所蔵の由緒書には、その祖は平有盛で「壇の浦から敗走して渡島し、この島で死去したと記されているという。『名勝図会』には、有盛の墓は「島内の社」にある自然石だとある。それはおそらく同島里村の中央にある「島中殿」のことであろうが、このシマナカドン（写真1）

いう（問答）。中之島日高家の由緒書に関連つけた書き様である。

以上でみてきたように、神社の縁起や由緒書、家譜などに、安德帝や平資盛を頂点とする平家落人軍団の十島一帯における行動が記されていたのである。それは、おそらくそれ以前に口づてに語られていた話を基にして記録したものであるが、その事実関係は全く不明である。ちなみに前掲の資盛の家臣とされる季長らもその実在の確証はない。ただ、前二者は『平家物語』や『源平盛衰記』に登場する侍大將上総五郎兵衛忠光・越中次郎兵衛盛嗣を誤ったものであろう。

硫黄島には、今も石垣に囲まれた長浜家の邸（写真2）があり、中に黒木御所の跡がある。その北方に御前山があり、かの赤間が関と同様の小さな五輪の石塔が無数に散在し、中に安德帝や櫛匣局<sup>くしはらばな</sup>、佐内侍<sup>すけのふだひ</sup>の墓（写真3）とされる石塔などがある。櫛匣局は資盛の娘でのにに安德帝の

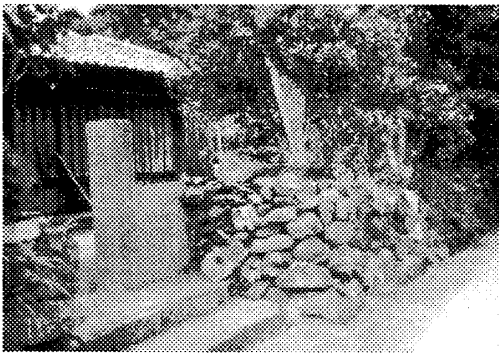


写真2 硫黄島長浜家



写真3 硫黄島安德帝墓(左)と櫛匣局墓(右)

后になったとされる女性で、佐内侍は時忠の娘で経正の室だという。これらの墓石は長浜家系譜等に拠って比定したものであろうが、明治二十八年五月十四日、ここを訪れた笹森儀助は、殊に安徳帝の墓に対して「信スル能ハサルモノアリ」(状況録)と断言している。確証がないからである。城ヶ原・永良部崎・稲村岳にも城塞らしき跡は、今はない。

長浜家の系図「嫡流系譜」についても、かつてこれを詳細に調査した森克巳氏が、「田舎まわりの系図師が、物好きな田舎字者の作為であることは明瞭である」と批判され、その作成年や、安徳帝愛用とされる鈴・鏡・鉦(長浜家所蔵)などの作られた年代は江戸後期と推定している。『日本残酷物語』第一部「七島灘をこえて」。肯綮にあたる指摘で、隣島黒島の大里にある五輪塔十一基が安徳帝陵とされていることや中之島で生涯をおえたとされる有盛が平島郡司の家譜では、壇の浦で戦死したと記載されるなど伝承や文書の記事にも矛盾したところがある。如上の



写真4 口之島の聖地「北山さま」

安徳帝や平家一門の話も事実無根と断定してよさそうである。では、なぜこのような作り話が形成されたのであろうか。

に硫黄島は「平家物語」に記載のある俊寛らの流滴の島である。成経・康頼らが帰洛を願って熊野の三所権現を勧請したことからこの社が建立されたことになっている。背景に熊野信仰がある。この信仰を伝播させたのは強力な熊野水軍で、その伝播は四国沿岸から鹿児島沿岸・種子島・硫黄島・沖縄本島に及び、社領増大の目的もあって各地に熊野神社を分布させたという。それは十二世紀後半から十三世紀初期のことだというのが、村田熙氏は鹿児島県での熊野信仰の定着を十四世紀末までとし、硫黄島熊野権現の勧請もこの年代を遡ることはないとしている。<sup>(9)</sup>



写真5 悪石島八幡神社の鳥居

仔細は割愛せざるを得ないが、七島の聖地は森の中に自然石や三つ石を置いて御神体とし、背後の樹から神が降臨してよりつく憑依<sup>(10)</sup>としているもの(写真4)が多く、沖縄の御嶽<sup>(11)</sup>と同じである。だが、同型の聖地でありながら、たとえば口之島の北山さまにはコの字型の篠竹を地面に立てて綱を張ったものがあり、悪石島の八幡神社鳥居の上部の島木には黒塗りの歯型文様(四〇個)が刻され(写真5)、丁字路には石敢当に似た九字石があった。いずれも修験道の



写真6 口之島慶元和尚墓

魔除けである。この北山サマは英彦山の三所権現の一つだといわれ、「中之島太夫文書」<sup>(10)</sup>によると同島にも三社（三所か）権現や北山十二社があったという。このように七島には修験道が流入しており、十島全域で熊野を主流とする山岳信仰（他に英彦山・厳島・霧島などあり）が生きている。当然、山伏の往来も長年にわたってあったと考えられ、前述の資盛家臣の山伏姿や英彦山山伏となつての、口之島肥後家の来島などは、そのことを暗示している。「弘治五年」（弘治は三年（一五五七）まで）大隅国古江村の慶元という修験者が口之島へ来島し、暴力をふるつて、殺害された事実もある（見聞録）。今、同島潮見峠の東側に墓（後年供養のため建立）がある（写真6）。銘「権大僧都慶元和尚」。島民はケイゲンサマという。当然、宗教的対立のあったことが考えられ、中世末、既に禅宗系の寺の存在したことが考えられる。<sup>(11)</sup>だが、この慶元のような修験者の来島は否定できない。おそらく島々を遊行した修験者や説法師

のような者たちが、島民の信仰を背景に唱導説話として語ったのが、当初の十島平家伝説ではなかったかと思われる。

のちになると各島の有力者が、この説話に付会させ特定の平氏の武将をとりこんで始祖とし、自らの氏族の優位性を誇示する。かくて彼らは互いに伝説上の親族となり、みごとに連帯を築きながら島の支配的地位にのしあがる。そんな構図が透けて見える。おそらく、それは南海の潮騒が高まり始めた十六世紀半ば以降ではないかと考えられる。内陸部での生産性の低い十島において、この頃から、彼らは封建領主島津氏と結託しながら海外交易や海上輸送、戦船の水先案内などに従事して財力を貯え、急速に発展しているからである。

たとえば、慶長二年、長浜家二十一代に末裔吉延は、島津義弘の朝鮮出兵に従軍して勲功をたて、平島日高家十四代の末裔盛勝は慶長十四年、島津藩の琉球侵攻に際して軍船の水先案内を務めている。彼は翌年、藩主家久が、捕虜となった琉球王尚寧を伴って江戸で將軍秀忠に謁見させた時も随行している（問答・見聞録）。また宝島平田家十代の末裔宗重は、永祿年間（一五五八―一六九）から琉球交易に従事し、異国の珍品を鹿兒島へ運んで商っている。同島の観音をまつる洞窟内からかつて唐銭が発見されたという（纂考）から、彼らは私的に中国貿易も行っていたと見てよいようである。十五代宗継は七島の有志と共に朝鮮の役に従軍し、琉球侵攻の時は斥候を務めたという（見聞録）。

ちなみに、『島嶼見聞録』によると、口之永良部島にも平家の末裔と称する日高・渡辺両家があり、中でも日高家は有盛の子孫と称して同島の東部海岸に住居をかまえ、その居館は曲輪をなし、本丸・二の丸等があったという。また、同じ東部の湯麦という地は、平家潜伏の地

とされ、古い墳墓があり、この地から陶器が発見されたという。

悪石島にも平家落人が住したとされる城塞跡がある。同島在住の西茂男氏の教示によると、それは現集落（上村）から北東へおよそ一キロ離れた山岳地で、看視台の跡があり、同地から水がめや陶器の破片などが発見されているという。また集落から東へ一・三キロ離れた女神山岬の根元にも城塞跡があったという。

熊本大学教授白木原和美氏らの発掘調査によって、同島から外国製の陶磁器の遺物が発見されている（熊本大学「文学部論叢」17号）。

おそらく、十島一帯に残る居館の廃居跡もかつては東シナ海から東南アジアへかけての海域を自由に往来しながら私的に海洋交易に従事した者たちの住居であつたにちがいない。沖縄諸島と同じように、十島も海外交易の中継地として栄えた時期があつたと見てよいようである。

### 三

白野夏雲は天長元年（八二四）種子国を廃して大隅に所属させ、朝廷が南島経営を放棄したから南海が「鬼界」というにふさわしく、海寇横行の海と化し、為朝・平家落人のような流刑人の放謫の地域になったのだと批判する。新井白石「南島志」に通ずる論調であるが、次いで彼は次のようにいう（句読点・ルビ、東補）。

元暦二年ヲ以テ平家悉ク壇ノ浦ニ滅ビ資盛・有盛・行盛ノ徒、遁テ南海ニ漂蕩シ、先隅州哀ノ浦・多嶺・屋久ノ諸島ヨリ硫黄島ニ

入り、凡三年ヲ経テ終ニ大島ニ達シ、六旬ニシテ悉ク全島ヲ取り、三人三分シテ之ニ拠リ其従随ノ士モ又多ク封ヲ分ツテ之ニ居ルト云フ。（七島問答卷之一・総説）

中之島で死んだはずの有盛までも奄美大島へ遁走させ、十島平家伝説に巧みにつなぎながら、奄美の平家伝説が作られていたのである。それは、いわば十島の続編である。そんな話がいつ頃作られたのであるうか。近世期の文献でいえば、大島代官（一八〇五—一〇七、在任）本田親孚の著「大島私考」に記載がある。同書「大島由来ノ事」の冒頭を引く（句読点、東補）。

天地開ケ何レノ世何レノ人住居シテ此島ヲ領地セシニヤ詳ナラス。往昔平氏ノ党没落シテ身ヲ西海ニ沈メシ時、三位中将資盛・少将有盛・左馬頭行盛ナル人漂流シテ戸口村島民ヲ教化シ遂ニ領地スト言ヒ伝フ。行盛ハ瀬名戸口村、有盛ハ名瀬浦上村、資盛ハ東間切大チヨンニ廟所アリト。蒲生権現・今井権現ノ両社ハ供奉ノ人々ニシテ没後権現ニ崇メシト云フ。

同書「神社之事」の章には、各武將の廟所が居城跡で、行盛の家臣蒲生左衛門・今井権太夫は深井浦（現笠利湾）入口の東西の岬で「大和船来着」の「防襲」に当たつたと記されている。兩人の居住地が権現社だとも記している。この権現社や右記の廟所も神社となつて現存するが、いずれも平家落人の居城跡たる確証はない。蒲生・今井両名の実在も文献上では確認できない。

『龍郷町誌』によると、宝暦八年（一七五八）代官が大島に存在する



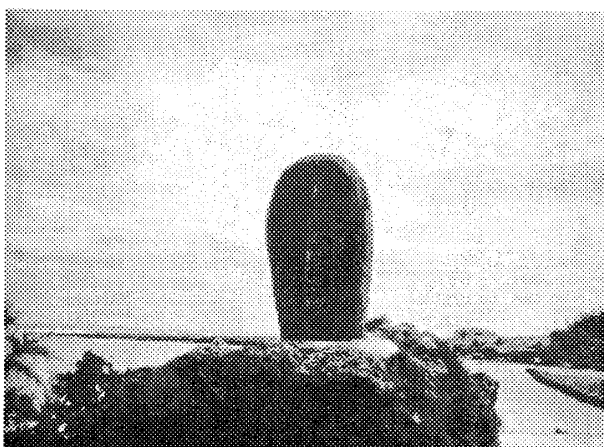


写真7 喜界島志戸桶港・平家上陸碑

七島の船頭が琉球王に訴え嘉靖二十四年（一五四五）二月、首里王府の三司官が行盛に諡<sup>おくりな</sup>を贈ったと記されていることである。尚清王が兵を發して大島の与湾大親を征討（一五三七）してから八年後のことであるが、王府編纂の正史にその記載はない。行盛居城跡とされる行盛神社は上戸口<sup>かみとぐち</sup>西方の丘

平家伝承の報告を命じたことがあり、これに応じ通事方<sup>よじとか</sup>与人格寿文と瀬名方泰横目貞俊が連名で「平家大島え御落人次第軍物語」と題する文書を書き代官所詰の横目宛、同年十二月提出したという。安永六年（一七七七）来島した藩士得能通昭がこれを転写し『通昭録』に採録して今に遺るという。だがそれは、安永二年六月、戸口のノロ（女神官）家出身の泰横目道響の提出した「平家没落由来書」とほとんど同じ内容だという。この「由来書」<sup>(1)</sup>では、資盛ら一行は屋久島を経てまず喜界島へ上陸したという。同島では志戸桶をその上陸地としている（写真7）。次いで大島を攻撃。激戦の末、大島全域を占領し、三武将が分割統治したことになる。この文書で注目されるのは、日本船が戸口沖を航行すると波が荒れるので、



写真8 戸口ヒラキ山

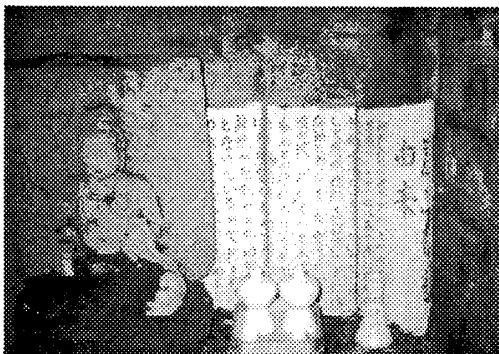


写真9 戸口開山観音

上にあって文政十三年建立の墓碑もある。明治三年、当地を發掘。積み石墓の中から小壺二個と大小の刀四挺が発見されたという（奄美史談）。また、かつて当社を祀ったノロ（女神官）の祭詞（オモリ）も昇曙夢（ロシア文学者）が採集している（『大奄美史』）。その祭詞で、行盛、阿応理屋恵<sup>あおりやえ</sup>（琉球の上級神官。初代は尚清王長女）・尚円王を礼讃しているところから見ると、この戸口が歴史的に琉球と何らかの関係があったことはまちがいない。

東方の良港は、早くも十二世紀以降異国との交易を可能にしたように、その経済力によってのしあがった土豪のグスク（城塞）が戸口にあった。これをヒラキ山（写真8）という。山麓に開山観音堂（写真9）があった。神社から北東に約一キロ離れた中戸口<sup>なかとぐち</sup>にある。一九六九年熊本大学の調査団により同地の發掘が行われ、南宋・元・明初の、青

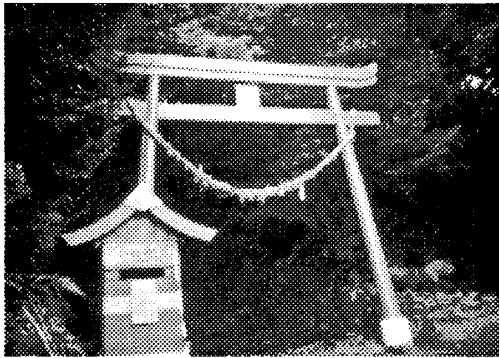


写真10 今井神社



写真11 蒲生神社。向こうの山頂に社殿がある。

磁・白磁・染付破片・南蛮陶器片などが出土している。殊に南宋磁器は上物で官窯のものであるという。二度にわたり同地が火災に遭っていることも確認されている。琉球察度王統が中国と進貢・冊封外交を開く以前から中国交易を行う強力な豪族が奄美にいたことがわかる。後年の与湾大親（在住地は筭利・宇検の二説あり）のように、この戸口の土豪が、琉球王府軍に攻撃されることは十分にあり得る。大山麟五郎氏は、『李朝実録』に拠りながらその年を一四四一年としている（『龍郷町誌』）。それ以降、戸口は琉球と十島・日本をつなぐ航路の主要な中継地として位置づけられたと考えられる。

北方の次の要津が筭利湾（津代港）である。往昔、湾口の西岬には天女の社があり（奄美史談）、東岬には按司の城（シラス）があった（『筭利町誌』）というから両岬が集落の拝所であったことはまちがいない。のち、両

岬に船舶看視の番所が置かれ、近世期に至って、それが今井・蒲生両権現社（写真10・11）にすりかえられたと考えられる。ちなみに、下野敏見氏によると、七島の平島では、近年もなお、旧暦九月九日の岳参りの折り、戸口の社とこの両権現に航海安全祈願の祝詞を捧げるという（『南西諸島の民俗』Ⅱ参照）。

諸鈍は加計呂麻島にあり、大島南端の良港である。資盛をまつる大屯神社（写真12）は海浜の森にあり、境内に文政十一年建立の小石碑（資盛墓碑・写真13）がある。今も旧暦九月九日に資盛に捧げる諸鈍芝居が興行されるが、かつてこの森はノロ祭祀の聖地でその神屋があったという（『瀬戸内町誌』）。

沖縄の歌謡「諸鈍長浜節」で知られるように当地は琉球との縁深く、尚清王に召されて寵愛された美女のノロの出身地でもある。嘉請年中、

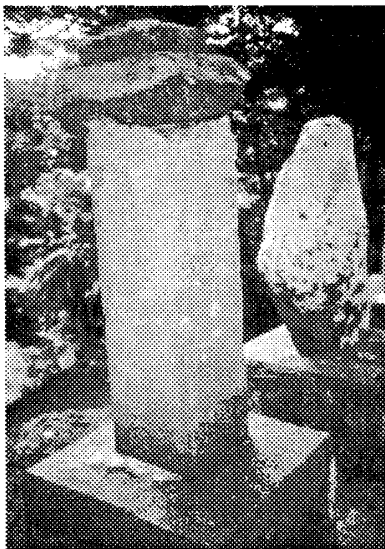


写真13 平資盛墓碑

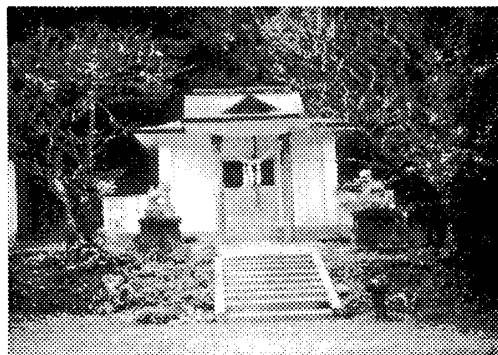


写真12 大屯神社



写真14 平有盛神社

このノロの兄弟親族が奢侈を極めるのを妬み、諸鈍の豪族伊喜与穂之兵屋・与見之知鬼与兄弟が尚清王に反逆して海寇を働き朝貢を断つたために、王府軍に鎮圧されている。この事件を記した『芝家代々記』(『大奄美史』所載)の記事は、鎮圧者側の視点で叙述されているにしても、王府軍諸鈍遠征は事実と見てよいだろう。集落内に琉球兵の屋敷跡とされる土地があり、諸鈍と安脚場の境の山中に城塞の痕跡が認められるという。諸鈍が戸口を結ぶ航路の南の要津であったことはまちがいない。

有盛の居城跡とされる有盛神社(写真14)は名瀬市浦上の大熊湾を望む小高い山の上にあり、文化十三年建立の墓石もある。琉球松の生い茂るこの山は一見して村の聖地であることがわかる。代官の記した墓誌によってもノロの拝所でもあったことがわかる。大熊湾も薩摩と結ぶ要津であり、その北岸の大熊には近世初期永年代官所が置かれた。浦上の隣村のこの大熊には、首里王府が同村のノロ宛に発行した隆慶五年(二五

七二)六月十一日付のほか万曆十五年、同三十五年、同三十七年の辞令書がある(毎日新聞社刊『奄美の島々』・『大熊誌』)。ちなみに、この

年、前述の豪族与湾大親の残党が貢租を断ち、軍船五十余艘で遠征してきた琉球軍に完全に鎮圧されている(中山世譜)。

一二六六年琉球に入貢した大島は、この十六世紀半ば頃には、琉球王とその后・聞得大君を頂点とする政治・宗教体制の中に完全に組み込まれていたことがわかる。ところで、有盛神社は、浦上川に沿った丘陵台地の先端部(標高45m)にあるが、近年、沖縄県立博物館の調査によつて、この先端部一帯はかつてグスク(城塞)であったことが確認された。(同館発行『城』)確かに頂上から麓にかけて山地を段々状に削平し九つの曲輪を造っている。大熊湾という良港を利用して栄えた豪族の居館跡だと思われるが、その城主や築城年は不明である。

#### 四

以上に掲げた平家伝説の伝承地は、見てきたように、かつて琉球王国と日本を結ぶ航路の要津であり、豪族の本拠地でもある。しかもうち二か所が国家の最高支配者琉球王の攻撃を受けている。奄美の亡び去った豪族を暗に平家の貴人に見立てその霊を祀らせることによつて、琉球という国家を外延するもう一つの国家の枠組みの中に島民を掬めようとする、そんな意図がこの伝説には内在しているように思う。つまり、そのモチーフは、いわゆる日琉同祖の思想である。極めて作意的なこの伝説は、おそらく、島津藩琉球侵攻後に進駐してきた代官やその付役たちが作ったもので、その流布には村落祭祀を司るノロや

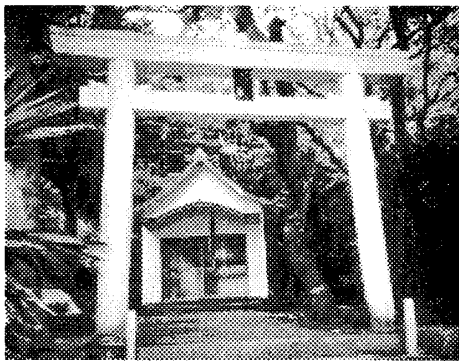


写真15 実久神社

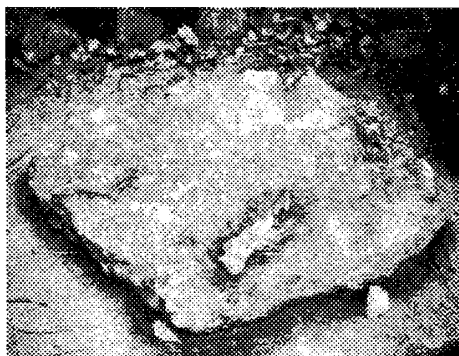


写真16 実久三次郎の足型石

島役人の長・与人らが関与していたと思われる。放擲され荒廃したゲスクやウタキを平家落人の居館跡とし、そこに各武將の、いわば崇りなす御霊を鎮めるための小祠を建て、これを靈位<sup>セイ</sup>高い神としてノ口に祀らせ島民に信仰させる。シユリガナシ（琉球王）とは異なるこの新たな「神」を恰も祖霊のごとく崇拝させることによって島民の教化（日本化）をはかり、十島へつなぐ航路を確保する。為政者のこの「文教政策」は、封印された島々の圧縮した精神空間へ急速に浸透し、みごとに成功をおさめている。

沖縄宮古島狩俣や石垣島川平周辺、与那国島にも平家伝説がある。喜舎場永珣は川平周辺の風葬場を平家落人墓としたのは、明治十八年九月、当地を巡回した西常央（のち八重山役所長）の想像によるもので、事実無根だと批判する（『八重山民俗誌』下）。田代安定が指摘したように、近世期から既に平家崇拝の風潮は先島にもあった。薩摩在番の

意図的な喧伝によるものだと考えられるが、島の有力者が自らの始祖を平氏に付会させて家伝を語る者も現われてくる。狩俣の平家居館跡・与那国の大和（屋島）墓ももちろん事実無根である。

加計呂麻島の東端に良港・実久<sup>ミタ</sup>がある。豪族実久三次郎の出身地であるが、彼は、喜界島小野津から渡ってきた源為朝と実久ナベシリカナとの間に生まれたことになっている。今、彼らの墓所・実久神社（写真15）には彼の巨人ぶりを示す足型石（写真16）や力石が置かれている。喜界島北端の港・小野津には為朝の放った狩俣の矢の刺さった所から湧き出たという泉があり、徳之島犬田布岳の頂上には、為朝が弓矢の図を彫ったという線刻画石二基がある。同島には他にも線刻画石がある（写真17・18）。沖之永良部島畦布<sup>アキフ</sup>には、為朝滞在の居館跡があり、その後裔と称する門閥家が手々<sup>テテ</sup>知名<sup>アキナ</sup>や赤館<sup>アカダン</sup>にいたという（笹森儀助『南嶋探験』）。奄美諸島の東シナ海側を南下して為朝は運天港へ渡ったことになるが、



写真17 徳之島・天城瀬滝の線刻画



写真18 徳之島母間の線刻画

沖繩の為朝伝説へみごとにつないだ奄美の為朝伝説である。馬琴の『弓張月』（続篇・残篇各巻之一）に、為朝が奄美大島へ上陸し、加計呂麻島にも滞在したとあるのを見ると、近世中期以前に、このような伝説が日本の首都でも広く知られていたことがわかる。だが、自らの氏族を誇示するために、為朝を始祖とし、山頂の線刻画や廃居跡など不可解な遺物・遺跡を為朝に付会させて作った話であることはまちがいない。実久三次郎は大島海峡（入口幅約五キロ）を大擢一かきで漕ぎ渡った巨人で大擢加那志といわれ、集落背後の山上に狼煙台を兼ねた番所を設け、しばしば、徳之島へ遠征したという。この口碑が暗示しているように、彼らは大島西岸一帯の海域を支配し、沖繩や日本、中国への航海に従事した豪族だったと考えられる。隣村の芝家同様、古琉球時代、沖繩から渡って来た氏族かも知れない。これらの奄美の為朝伝説がいつ頃形成されたのか不明であるが、遺物や廃居跡に付会した為朝伝説は、明らかに近世期の伝承である。

沖繩本島に為朝が上陸し、逆賊に今帰仁から巨石の礫を投じたという話が袋中の『琉球神道記』にあり、琉球征伐後、その子が島の主君に就任したことが大龍寺文之の『南浦文集』に出ている。指摘のある室町時代の学僧・月舟寿桂は疑問を呈しながらも、為朝が琉球を討伐して日本の付庸にしたという話があったと『幻雲文集』鶴翁字銘に記している。古代末期、薩摩地方平家の総領として威をふるった阿多平四郎忠景は、一説に為朝の舅とされているが、彼ら一門は七島と奄美・沖繩諸島を自らの支配地と称したという（図会）。統合の蝕手はじ

つに根深く延びていたのである。その蝕手に応じながら王府周辺で作られ、衆口によって広められたのが沖繩の為朝伝説であろう。

周知のように、沖繩には、源為朝が「運を天にまかせて航海し」、本島本部半島の運天港に上陸したという伝説がある。今の下運天であるが、港の西部の崖一帯は百按司墓という風葬跡があり、崖の上には、海軍元師・東郷平八郎の揮毫になる石碑「源為朝公上陸之趾」（大正十一年五月建之。写真19）がある。それ

より尾根づたいに北へ行くと森の中に洞窟があり、上陸後、為朝はしば

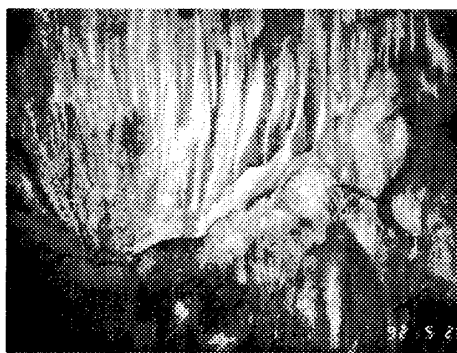


写真20 運天為朝洞穴（為朝五指跡）



写真19 運天の為朝上陸碑

らくここに住んだという。洞口の岩石に、巨人為朝の五指の跡とされる鍾乳石がある（写真20）。

為朝はさらに南下する。浦添城跡東端にはとがった男根状の岩があり、為朝はこれに足をかけて弓を引いたという（写真21）。さらに南部の現・糸満市高嶺の南山城跡

(現・高嶺小学校) 北方には、為朝が大里按司の妹と夫婦の契りを結んだという和解森(写真22)がある。二人の間に生まれたのが初代の琉球王・舜天ということになっており、このことは、近世期、王府で編纂された正史『中山世譜』(一七〇一年成立)にも記載があり、「史実」とされている。参考までに該当の記事を引く。

南宋乾道元年乙酉。鎮西為朝公。随<sub>レ</sub>流至<sub>レ</sub>国。生<sub>二</sub>子<sub>一</sub>而返。其子名<sub>二</sub>尊敦<sub>一</sub>。後為<sub>二</sub>浦添按司<sub>一</sub>。淳熙年間。天孫氏二十五紀之裔孫。為<sub>二</sub>権臣利勇所<sub>レ</sub>滅。時浦添按司尊敦。倡<sub>レ</sub>義起<sub>レ</sub>兵。来<sub>レ</sub>誅<sub>二</sub>利勇<sub>一</sub>。国人推<sub>二</sub>戴尊敦<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>君。是舜天王也。

ちなみに、乾道元年とは、一一六五年。淳熙年間とは一一七四年、



写真21 浦添城跡の為朝岩



写真22 南山城下の和解森

一一八九年。いずれも日本の平安朝末期にあたる。天孫氏とは、沖縄の首長のようなものだと考えられており、その二十五代目の末裔が、権謀術数にたけた家来利勇に淳熙年間亡ぼされる。為朝の子、尊敦はのち浦添按司となり、挙兵して利勇を討ち、国人に推されて君となった。これが初代の舜天王だと記してある。即位は一一八七年とある。平家滅亡の翌々年のことである。

一方、為朝は、若君と妻を置いたまま、わが子のこの出世を見ることもなく、浦添の牧港からヤマト(日本)へ旅立つて行ったという。復路のコースは全く不明である。

以上が沖縄に伝えられた為朝伝説のあらましであるが、これもまた確証は全くない。為朝帰路のことが全く語られないばかりか、沖縄本島にだけこの伝説があつて先島にないのはなぜであろうか。今後になお大きな課題を残す伝説である。

#### 注

(1) 三一書房刊『日本庶民生活史料集成』第二巻所収に拠る。

(2) 正しくは一〇二か所。下記の「番頭」も誤り。外城の長は「地頭」といい、島津氏の一族や功勞のあつた武將がその任に当たった。この外城制度は戦国時代に始まったが、翌天明四年、外城を郷と改称し、「軍事組織からしだいに産業行政の制度にかわっていった」(平凡社刊『風土記日本』1)という。

(3) 版本六〇卷二〇冊。著者は島津藩士五代秀堯・橋本兼柄。明治三十八年刊の活字本がある。ここでは青潮社発行の同本復刻版による。以下『図会』と略称。

(4) 「明治四年正月十五日」付の「樺山資雄等」の序あり。始め八田知紀・樺山資雄ら五名が編集を始め、のち関盛長・境田通古らがこれを受け継いで刊行された。昭和四十六年鹿児島県地方史学会発行の復刻版がある。ここではこれに拠った。以下『纂考』と略称。

(5) 著者白野夏雲（一八二七—一八九九）は本名今泉耕作。甲州大月に生まれた元・士族。若くして江戸に出、上野戦争に幕府軍として参戦。のち北海道開拓使・内務省に勤務。明治十二年五月、鹿児島県令の懇願によって県属に就任。『七島問答』付載の「南島航路之図」に「明治十七年薩州川辺郡各島巡回ノ命ヲ奉シ三月二十九日鹿籠枕崎浦ヲ発シ五月六日大島郡伊津部港ニ達スルヲ得タリ」とある。『七島問答』の原本は写本。鹿児島県立図書館蔵。ここでは、ハワイ大学ハミルトン図書館ホーレイ文庫撮影写真に拠る。以下『問答』と略称。『十島図譜』はこの踏査の時に各島を描いたデッサン帖。

(6) 活字本。同書末の「復命書写」に「本年五月廿五日発覽ス」「同十月三日無恙帰庁セリ」とある。明治二十年発行。ここでは、大阪大学付属図書館所蔵・旧懷徳堂文庫蔵本による。以下『見聞録』と略称。

(7) 写本十冊。青森県立図書館蔵。各冊冒頭に明治十八年測量の各島の地図（手写）がある。以下『状況録』と略称。三二書房刊『日本庶民

生活史料集成』第一巻に翻刻がある。明治二十八年五月十一日竹島に渡り、八月二十七日名瀬に至る（『川辺郡拾島巡廻日記』）。

(8) ちなみに『三島村誌』では、吉英は元、隆盛親王といい、安徳帝とその后・櫛匣局との間に、承久三年六月一日誕生した皇子だったとされている。のち帝はわが子のことを案じて側近の平吉資の子・吉盛にわが子をあずけ、その養子にしたという。そして、元服後、名を吉英に改めたという。なお、同書掲載の系図によれば、吉資は資盛の子になっている。以下のとおりである。

平清盛—重盛—資盛—吉資—吉盛…（養子）吉英

(9) 「種子・屋久・トカラ列島の山岳信仰」（名著出版『英彦山と九州の修験道』所収）

(10) 太夫は島の神事と行行う人のこと。太夫のとなえる祝詞を記したものが太夫文書。下野敏見氏によると、「中之島太夫文書」に次のような記載があるという。

「権現に参らする、嶽中ゆきなな、裾なかの御前に参らする、嶋中に祝れ絵ふ中嶋三社権現に参らする、嶋こひろう、国こひろう、大戸との、小戸殿に参らする、地主の御前の左座に祝れ給ふ、北山十二社の御前、風本権現に参らする、かんこ海上に御立あつて、もとひ矢房に御祭り有て、お守り給れとの御祈祷に参らする」（下野敏見『南西諸島の民俗』Ⅱ所収）。

(11) 口之島には近世期、潮音寺という禅宗系の寺があった。おそらく、中世期にも存在したと思われる。下野敏見氏は、慶元和尚殺害の真の

原因は「潮音寺の禪宗活動のフィールドに薩摩真言宗の山伏がやってきて布教しようとした宗教的対立」であると推定している（前注記載書参照）。

印がある。

あずま よしもち（民俗学・国文学）

(12) 奄美資料第二集『大島私考』（一九七二年三月、鹿児島県立図書館奄美分館発行）に拠った。

(13) ここでは、名瀬市史資料第三集『奄美史談・南島語及文学・徳之島事情』（一九六四年三月、名瀬市史編纂委員会発行）所収に拠った。

(14) ヒラキ山は戸口の北東部にある小高い丘。丘上は平地で、現在は耕地になっている。山麓に「開山観音堂」があった。現在は小祠があり、中に石造の千手観音像がある。建造年は不明であるが、手に弓や鉾、カギ・矢などの武器を持っている。武人をかたどっているのは明らかである。祠の前に「元禄十二年□月吉日」という刻銘のある石燈籠がある。この観音とヒラキ山居館（グスク）との関係は不明。

(15) 吉満義志信（一八六〇—一九一八）の『徳之島事情』（明治28年編）に「犬田布岳ノ頂上ニハ、長サ六尺幅三尺ノ石二個アリ。一個ハ直立シ一個ハ横タヘ、其面石ニ弓形矢形ヲ画キ（此石ヲ矢一タト云フ）、傍ニ古字ヲ彫書シタル蹟アレドモ、其文意不明ナリ。此石ハ昔源氏ノ彫画シタルモノナリト口牌に伝フ。」とある。この二個の石は現存するが、その線刻画は落剥しているという。同島には、ほかに天城町瀬滝の秋利神川北岸の山中、戸森に二個の線刻画石がある。弓矢・帆船等の図を無数に刻す。同島母間（はま）の西方、反川（たんかわ）の山中にも同様の図を彫った巨石がある。線刻の中に真東の大島に向いている矢